

共産同

第14号



☆ 通合赤軍派事件に対する共産主義者同盟の自己批判

—— 暴力・党 粛清 ——

松本礼二・一条信路

☆ 三里塚 鉄塔建設報告

社会学同 三里塚現闘本部

☆ 反革命包圍網に対する反撃に向けて

社会主義学生同盟



共産主義者同盟(再建準備委員会)

連合赤軍派事件に対する

共産主義者同盟の自己批判

暴力・党・粛清について

Ⅰ 連合赤軍派リンチ殺人事件 の階級情勢への影響

連合赤軍派リンチ殺人事件は単に一セクトの誤まった路線の自滅の最終過程を意味するのみならず、本質的には、新左翼十余年の一つの時代が幕を下した事を意味している。

新左翼が既成左翼から分離し、登場して以降に形成されてきた大衆との基本的関係が終了し、今後いかなるセクトが大衆の信頼を獲得して生き残るにせよ、これまでのような曖昧な形での大衆との信頼関係は成立しえないと考えられる。日本においても、世界においても、既成左翼が大衆の期待に応えられなかったという条件の中から新左翼は大衆の心情を代表し、大衆に対し開かれた存在として、大衆に支えられて登場した。しかし、新左翼総体はいまだそれに応えるに足りる独自の路線を解答として示し、新たなる大衆との関係を形成していない。それどころか、大衆との関係自体、既成左翼と異なっている事すら明確に出来ず、連合赤軍派リンチ殺人事件によって旧態依然たるその体質を暴露してしまったのである。

我々がリンチ殺人事件のみを取り上げて批判するかぎり、形式的論理の問題となり「やつらは質が悪かった。」という以上の結論は出てこない。赤軍派残党の一部の主張する粛清の「やり方が間違っていた。」とか「森、永田は指導者の資格がない。」とは自己批判ではなく責任のがれでしかない。そして、赤軍派残党同様「銃撃戦支持、リンチ殺人批判」をとなえる赤軍派の後追い、水増し派たる戦旗諸派の謬君の主張もリンチ殺人の再発を防ぐ論理を持たぬ、状況追隨にすぎない。連合赤軍の浅間銃撃戦を用意し、またその性格をつくり出したものこそ、連合赤軍派の形成であり、その組織過程の必然としてのリンチ殺人であつた以上、両者を切り離して論ずる事は形式論理にすぎない。問われているのは、リンチ殺人事件を生み出した基本的な思想なのである。(それがどれだけ論理の形をとっているかは別として)

現在では連合赤軍派のリンチ殺人事件を誤り、悪い事だと主張するか否かが問題とされているのではない。組織の自滅と国家権力による反革命の増大、プロレタリア大衆の左翼不信の増大、……答えは客観的に明らかであり、銃撃戦についても、このような集団に担われる事によつて、銃撃戦一般への負の評価が増大し、(銃撃戦それ自体を肯定あるいは否定の対象とする事は誤りである。)秩序イデオロギーの強化に役立つている。銃撃戦とは敵を殺す事であり、リンチ殺人とは「脱落

者（敵の可能性を持つ者）」を殺す事であり、形式論理上は原理的に分ける事は不可能であり、運用上の問題（判定の問題）が残るにすぎない。敵はこの論理を逆用する事によつて同志を殺害した事に対する大衆の嫌悪感を、銃撃戦の否定へ、「暴力」の否定へ、秩序への協力へと誘導している。

これは70年安保闘争へ向う闘いにおいて敵の政治的反撃の基本政策の仕上げとして存在しているのである。60年代後半の闘いは戦後的市民秩序、民主主義の左翼的防衛を大衆の根拠にしてはいなかった。戦後的秩序の底辺における解体を根拠とする、自然発生的暴力的な大衆の不満の顕在化こそそのエネルギー源であつた。それに対する国家権力の反撃・弾圧も、そのため単なる行政的、物理的な弾圧にとどまりえなかつた。底辺において解体しつつある大衆の秩序を国家権力はいかに再組織化・動員するかが問題とされた。過激派対国民という対決軸を市民的秩序を土台として形成し、過激派を国民の外へほり出す事によつて再統合をはかるという基本戦略が国家権力によつて進められた。しかも、自警団を支えた市民的秩序とは私有財産の防衛そのものである事が露骨でそれだけでは下層大衆、プチブル・インテリゲンチヤをも組み込むには未だ不十分であり、その関係が一層イデオロギー化され、人命、人権問題となる事によつて、より広域な大衆をまき込む事に成功しつつある。「同志をあれだけ多く無惨に殺すなんて、奴らは人間ではない。」「ブルジョア社会であつても証拠に基づき、弁護人もついて刑が決まれるのに、権力のある者の意のままに殺人が行なわれるのではブルジョア社会以下である。」……現時点における階級攻防戦は新左翼がこのような批判に答えられず、反革命に包囲された状況にありこれを打開する道を明らかにする作業としての自己点検、自己批判が必要である。

これらの批判そのものは、ブルジョア民主

主義をささえている暴力性と、その暴力性が陰蔽されうるブルジョア社会の安定的条件を見ないかぎり本質的批判たりえないのは確かではある。しかし、このような大衆の批判は連合赤軍派の指導部の判断の誤り、資質の欠如、あるいは、追いつめられた状況における精神病理学の問題として、この問題をとらえるより、本質に触れている事は確かなのである。我々の自己批判とは、連合赤軍派への倫理的批判ではなく、この過程の必然性と、これを生みだした新左翼十年の歴史においても払拭しきれなかつた旧左翼以来の体質とは何かを明らかにする事でなくてはならない。

II 大衆暴力と暴力の頹廢

我々は革命とは大衆の暴力に依拠する事業であることを広言し、大衆暴力斗争を拡大しより高度のものとし、その闘争の中で、我々の任務を位置づけてきた。そして、この「暴力」の性格をめぐつて、赤軍派、戦旗諸派の諸君との分派闘争は展開された。かれらに共通し、さらには、この事件に関連して「暴力革命は現代日本において可能か？」と疑問を投げかけた人々にも共通する「暴力」を「手段」の問題として考える方法に対して、我々は一貫して反対してきた。「暴力」とは社会的な大衆の存在様式に関わる問題であつて、革命の手段、あるいは技術として現時点では論ずる事はできない。「暴力」が手段、技術の問題として登場するのは、革命にとつて部分的問題であつて、権力奪取の瞬間においてとくに重要性を持ちうるが、それとても、政治的技術の問題としてである。平和革命も暴力革命もなお我々の将来にかかっている現時点において手段の可否が一般的に論じられる事はそもそもおかしいのである。

赤軍派およびその亜流のつまづきは、60年代後半の大衆の暴力的闘いを、闘争の手段技術の問題に矮小化し、その結果、闘いの発展を武器の問題、そしてそれを扱う「軍士」の問題へと矮小化したところにある。技術の問題として考えるかぎり、60年代大衆暴力は国家権力の暴力に勝つ力量は持っていなかつたし、小セクトの軍事力においてはなおさら問題にもならない。だが大衆の暴力は国家の暴力によつて根をかる事は不可能なのである。

60年代の世界的な同時代性を刻印された大衆の暴力的叛乱、それは現在「世界的な法と秩序」の再編の中で抑えられつつあるが、この叛乱の意味は、戦後世界体制の底辺における社会的動揺の開始の合図であつた。戦後日本の政治社会秩序は単に狭義の国家権力の暴力によつてのみ維持されてきたのではなく戦後の社会的構造内部に安定的に位置づけられた大衆の存在自体を支えられ、それによつて大衆の暴力性は隠されたままであつた。そのため国家権力の暴力性もまた隠された存在となり、その隠蔽された形態で国家権力の暴力性もまた大衆の同意を得てきた。

大衆の暴力叛乱とは、大衆そのものをつないでいた戦後市民社会の構造の解体と、その結果としての大衆の分裂と分極化に根拠を持つている。資本の地域支配と企業内秩序によつて支えられた日本市民社会は資本の発展そのものが生み出した都市の流民化、企業所属意識の低下の中で根底における解体を開始している。寄るべき構造を持たぬ大衆が街頭へあふれ出すことを通じて大衆は暴力反乱大衆として社会的存在を主張した。それゆえブルジョアの階級的反攻が警察権力を先頭とする街頭弾圧を中心に置かれたのは当然である。だが敵はそれに止まらず、自警団の組織化に見られるごとく、大衆の国家権力による直接的組織化、左翼に対する大衆の包囲網の形成へと乗り出したのである。

60年代後半の敗北とは、大衆的反革命包囲網の形成とその表現としての「反革命軍事網」の羽田周辺制圧であつた。敗北はまづたく政治的であり、政治的敗北の結果としての軍事的敗北にすぎなかつた。暴力叛乱を形成した大衆の存在と、その自然成長的叛乱の敗北は赤軍派及びその亜流への心情的シンパシーを一時的に形成した事は当然であるが、その路線の自滅もまた約束されていたのである。なぜならば大衆暴力が持つ社会的根拠を離れた暴力は、大衆暴力が持つ根源的な衝動力と再生力を失なつた単なる風俗に過ぎないからである。赤軍派の形成は、大衆暴力の風俗化のメルクマールである。人質によつてしか展開できなかつた銃撃戦こそ、人民の正義の闘いの意味を失なつた、単なる反権力の風俗化したアピールの性格を物語っている。

我々は、大衆の革命的能力への絶望に根ざした赤軍派、戦旗派の党の軍事力による革命という路線に反対し、大衆暴力の形成とその発展を基本路線として分派闘争を展開してきた。彼らは大衆の暴力闘争の自然生長の限界を指摘する事によつて、革命がプロレタリア大衆の事業である事を否定する根拠となると錯覚し、党派の軍事組織に革命の軍事力を限定してしまつた。赤軍派と戦旗派の違いは単なる用語法の違い以上ではなく、それが「軍=党」と名づけられるか「党の軍隊」と名づけられようとは内容は変わらない。そして党が先か軍が先かなどという論議など「ニワトリが先か、卵が先か」という論議と同じスコラ論議にすぎない。

大衆の暴力と党の暴力の基本的差異を考える事なく、党の暴力によつて大衆の暴力に代置させる時、「暴力」の問題は階級闘争の本質的課題として、階級関係そのもの、社会構造そのものの内在的問題である事をやめ、技術手段の問題へ転化するのには党そのものもつ必然性なのであつていかなる路線を持つ党であるかには無関係である。

大衆の暴力と革命の暴力の間にある裂け目は、大衆の自然成長性を否定し、党の意識性を代置することによつては解決されえない。大衆の暴力を革命の暴力へ転化し、組織化する困難性こそ、革命の主要な問題であつて革命の全過程の課題そのものである。これを避ける事は政治組織にとつて政治的指導の放棄そのもの、自らの存在の否定に他ならない。そして大衆の事業を肩がわりしようとする発想は、プロレタリア革命の基本理念の否定であり、政治思想として見ればブルジョア政治思想（民主主義からファシズムまで含む）への屈服である。彼らがプロレタリア大衆の暴力の外に革命の暴力を形成しようとした事は山岳アジトを軸とする赤軍形成という政策を許すものとなつている。彼らが都市を離れ、山へこもつたことは、単に治安当局による、都市のアパート・ローラー作戦に追われたという以上の意味を持つ。

軍事問題に限定して論じた場合でも、革命の軍事とは大衆暴力との関係において成立するものであつて、党も革命軍もそれを離れては存在しえない。そして現代日本の大衆の暴力反乱とは、都市大衆の暴力が基軸である以上、山へこもる事は大衆暴力との訣別を意味する。彼らもまた農村が革命根拠地たりうるとは考えていなかったはずであり、彼らは軍事訓練の容易さ、権力からの隠れやすさという技術的要因から山岳アジトを設定したことは明らかである。まさしくこの発想において彼らは軍事の問題を技術的見地から、すなわち社会的諸条件を固定的にとらえ、そのうえで技術的解決をはかる基本的態度を持つていた事が明らかになるのである。都市から追われるという状況そのものの意味がまったく彼らにわかつていないのである。

政治的に見るかぎり、そして赤軍派の内部状況の本当のところは、ハイジャックにせよ銃撃戦にせよ、政治的敗北過程、政治的逃亡過程以外ではなかつたし、これらを評価する

事はまったく出来ない。これらが、政治的社会的状況を反映するものであり、その本質を暴露する役に立つたとしても、風俗とは常にそのようなものであり、なんらその事は評価の対象ではないし、同情の対象でもない。

他方、彼らの行動をプチブル急進主義であるとして批判する日共・革マル・青解の諸派がいる。たしかに、連合赤軍派はプチブル急進主義の組織には相違ないであろう。だがそのような批判は単なるレッテル貼りにすぎず批判者自体がそうでない証拠にはならないしプチブル急進主義の持つ社会的意味、革命過程における意義をみる事のない教条主義に過ぎない。かれらは、プチブル急進主義でない急進主義が現在どこに存在しているかを指摘する事は出来ないであろう。形態上は、都市大衆の自然発生的叛乱とはプチブル、あるいはルンプロの急進主義的叛乱以上のものでない事は自明の事なのであり、それ以外にいかなる急進的プロレタリアートが存在し、闘つているかを指摘してみればよいのだ。いいかえれば、何をもちつてプロレタリア階級と呼ぶのかが問題なのだ。

我々は資本制秩序によつて整備されたブルジョアの階級配置、そこにおける資本家対労働者の対立が革命の動因であるとは考えないこの関係は対立であると同時に相互に補完的であり、根本的対立は不可能なのである。我々は、そのようなブルジョアの階級編成としての労働者階級が革命の主体とも考えていない。ブルジョアの階級編成の安定性の解体を根拠として、労働者階級がブルジョア社会における安定的位置を喪失し、ブルジョアの秩序の一端を担いえなくなつた時にはじめて、プロレタリアートは顕在化し、革命的に組織化される前提を形成すると考えている。

大衆暴力に我々が注目するのは、大衆の暴力叛乱の中にはじめて、プロレタリアートの登場を見る事が出来るからであり、ブルジョアの階級編成の解体を見る事が出来るからで

ある。かつて共産主義者同盟における、我々と、マルクス主義戦線派の諸君との分派闘争における論点の一つに労働組合評価があつた。彼らは労働組合を階級的組織として、全面的に肯定的評価を与え、そこにおけるヘゲモニーの問題、党の大衆支配力を階級闘争の軸にすえた、党建設＝階級形成という理論であつた。それに対し、我々は、プロレタリアートの階級形成の問題を、我々の組合へのヘゲモニーの問題に矮小化する事なく、組合の大衆掌握力の低下そのものに、ブルジョア秩序の大衆掌握力の低下、プロレタリアートの登場の根拠、新たな組織化の可能性を既成の組織形態にとらわれずに検討する事を主張した。プチブル急進主義批判者達は、マルクス主義のプロレタリアートの労働組合への組織化過程およびその革命性と、ブルジョアの階級編成としての現代労働組合内における活動とを同一のものとみる誤りを犯しているのである。

我々はこのような既存の階級配置の分解の表現として、叛乱し、新たなプロレタリアートの共同性を求める大衆の動きとしての大衆暴力に注目するのである。それゆえ、我々にとつて暴力、あるいは軍事の問題は、階級情勢を軍事技術上の問題として解決しようしたり、ともかく権力への闘争姿勢の問題として武装闘争を行う事でもなく、いつかある日時期が来たら武装闘争を行う事を確信し、その時期の判定要因を述べる事が要求されているのではない。さらにまた現代社会の条件では暴力革命は可能かどうかを論ずる事でもちろんない。現に存在する大衆の暴力が日本の革命にとつていかなる意味を持ち、革命闘争の発展にどのようにすれば力となりうるかを明らかにし、革命闘争に組織する事である。ブルジョアジーの軍事力、暴力を解体しプロレタリアートの軍事力、暴力を形成してゆく事は革命の本質的課題であつて技術のレベルにおいてのみ取り扱つてはならない事である。

ある。大衆の“暴力”とは現代社会において一つの与件であつて、“暴力”を選ぶか否かという選択の問題ではないのである。

Ⅲ 党と軍隊

— 階級闘争にとって合法・非合法とは何か —

大衆暴力の限界を技術およびその担い手たる党軍の問題として解決しようとする発想は大衆の革命的能力への不信を根拠にしている事を前章で我々は指摘した。

我々は党と大衆の革命運動における二元的構造の矛盾を、現時点において解消しようとした赤軍派、戦旗派、叛旗派等の一切の企てに反対してきた。我々が党と大衆とを二元的であると言うのは、指導するものと、指導されるものという古典的区分によつていのではないし、目ざめたものと、目ざめないものという区分でもない。このような差異とは、本質的には連続的な過程、自然成長的過程であつて質的差異を形成するものではないと我々は考えている。党と革命的プロレタリアートの違いはその政治的意識性の差にあるのではない。赤軍派、戦旗派の諸君はこれを理解しないからこそ、党の政治的指導性を党の大衆支配力と混同したり、党と大衆の矛盾を、「軍」「党軍」「共同体」などによつて解決してみせたりしてくれる。これらの諸派の主張する閉鎖的闘争共同体内における等質的・あるいは連続的な人間関係は、なんら党と大衆の矛盾を解決するものではなく、それを回避しているにすぎない。革命的大衆組織と党組織の違いは組織原理、結合様式の違いとして存在している。党は革命の手段、道具で

あり、そのようなものとして組織される事への意識的参加、すなわち自らを、政治的技術者、手段へと限定するという意識性にその組織原理が存在する。党の意識性とは革命の必然性、あるいは革命のすじ道をどれだけ意識するかという意味での意識性を理解されるべきではない。そしてプロレタリアートの自然成長性と、政治的意識化とは同一の過程である。プロレタリアートがプロレタリアートとして闘争過程に動員され、組織され、政治的意識性を身につける事は、革命運動そのものであり、プロレタリアートの権力の形成すなわち階級形成そのものである。これに対し、プロレタリアが党に組織され、政治的意識を高めようとも、それ自体は革命の前進、階級形成を意味するものではなく、単に党が力をつけたに過ぎない。党は革命過程に対してはプロレタリアートの手段としての存在にすぎず、その活動の結果がプロレタリアの政治的前進に役立つてはじめて、革命にならばほどの寄与をしたことになるのであつて、党への大衆の組織化（それが軍隊としてであろうとなかろうと）が革命の前進であるとする、日共から革マル、赤軍に至る考えは逆立ちしている。

日共・革マル・連合赤軍を貫ぬく、組織内批判者、他党派を反革命として抹殺せんとするリンチの伝統は革命と党を二重うつしにする組織論・革命論を根拠としている。革命戦争においても、戦線逃亡、指令違反等は「戦争」そのものの論理として処刑が必然となる。（だが処刑を大衆が「合法化」するのは、それが大衆に支持された公的権力によるものの場合である事に注意せよ。）そして党と革命の同一視が存在する以上、組織の絶対性と、それからはずれたものを敵とする事も必然となるのである。すなわち革命は組織の内側にのみ存在し、組織の外側は反革命領域であるとする考えが必然的に導かれる。粛清の論理が現実化する過程は、その組織が置かれた主

観的状况がいかなるものであるかによつて異なるであろうし、閉鎖集団における精神錯乱的状况ももちろん起りうる。だがそのような状況にあつても狂気が粛清を起したのではなく正気の論理がそれを可能にし、狂気が存在したところで、それに色どりをそえたにすぎない。

革命の全過程、全構造において党は大衆を指導するものであり、大衆は党によつて指導されるものであるとする考えは、党をプロレタリア階級の全てにわたる指導者であるとする事であり、結果として、党によつてプロレタリア階級は代表され、党によつて革命は代表される事になり、党への批判者は革命への批判者、敵対者となる。この論理構造を変え、事なしには、スターリン主義的粛清の再発は不可避であろう。彼らの党の位置は大衆の指導部であるという事で、分離されているように質的には区分されてはいない。指導と被指導とは運動の効率としての機能的分業以上のものではないしこれはあらゆる運動について廻るものである。前衛党なる概念自体党が先験的に大衆の指導部である事を意味し、大衆と一体のものである事が実は前提とされている。このような事は虚構である。革命を目指す党と、現体制に叛乱する大衆が一体となるのは革命の高揚する一瞬であつて、それに至る過程においては、両者は本質的に断絶しているのが当然である。このかぎりでは、革命の瞬間に至るまでは、党は大衆に開かれてはいないし、それゆえ党は大衆を代表すると主張するいかなる根拠も有してはいないし、党への反逆を反革命であるとする根拠も有してはいないのである。さらに党という存在自体、共産主義革命にとつては矛盾である。なぜならば党とはあくまでも政治的手段、専門家集団であつて、政治がプロフェSSIONALであるようなこのようなあり方そのものが革命の目的とは矛盾する。そして革命とは、プロレタリア大衆が政治に参加する事により、プ

ルジョア的な大衆不在の政治過程の解体の中、物質的にも精神的にも依拠する事は不可能である。党の軍隊は人民の軍隊と結合する事なしには、革命の暴力としては機能しえず、単なる私闘の役にしか立つことが出来ない事は、この間の多くの「党の軍隊」が内ゲバ専用部隊になり下つている事で証明されている。連合赤軍派の自滅過程は戦旗派の批判するように党がなかつたからではない。革命の軍事を党の軍隊で代行させようとするときにその発展を保障する条件を失い自滅せざるをえない事を示しているのである。M（マラー）作戦は彼らの戦闘力を支える物質力を形成するのではなく、彼らの破滅を促進するものであつたし、「赤軍」は人民の海にかくれるどころか大衆に摘発され、粉砕された。そしてまた彼らは軍の統一でなく、党の統一、新党結成を行なおうとする過程としてリンチ殺人という自滅過程が開始されたのであり、建党は彼らを救うものではなく、その逆であつた。次に我々は彼らが組織の脱落分子、動揺分子をきわめて恐れ、次々に処刑していつた過程に注目すると同時に、これと彼らが内ゲバを今後やらないようにしよう他党派にかつて語つた事実とがいかなる論理的な一貫性を持っているのかを検討する必要がある。一般には、きれいな事を言つていながら、それと違つた事を行なつた彼らの弱さ、あるいは革命的資質のなさが語られているが、これは全くピントはずれであつて、赤軍派は論理的に一貫しているのである。彼らは他の左翼党派とはゲバトを行なわないと言つたのであつて組織内の粛清、テロルは一度も否定してはいない。彼らにとつて革命の内と外は赤軍派の内と外に一致し、その内部においては軍隊の規律（実はブルジョア軍隊の規律）が唯一の組織原理であつて、その外は即ち革命の外側であつて、そこでの活動は第二軍あるいはブルジョア的合法の枠内の組織にすぎず、その活動家は同伴者、お客様としてしか「革命組織の人間」によつては扱かわれない。外側の

ルジョア的な大衆不在の政治過程の解体の中、物質的にも精神的にも依拠する事は不可能である。党の軍隊は人民の軍隊と結合する事なしには、革命の暴力としては機能しえず、単なる私闘の役にしか立つことが出来ない事は、この間の多くの「党の軍隊」が内ゲバ専用部隊になり下つている事で証明されている。連合赤軍派の自滅過程は戦旗派の批判するように党がなかつたからではない。革命の軍事を党の軍隊で代行させようとするときにその発展を保障する条件を失い自滅せざるをえない事を示しているのである。M（マラー）作戦は彼らの戦闘力を支える物質力を形成するのではなく、彼らの破滅を促進するものであつたし、「赤軍」は人民の海にかくれるどころか大衆に摘発され、粉砕された。そしてまた彼らは軍の統一でなく、党の統一、新党結成を行なおうとする過程としてリンチ殺人という自滅過程が開始されたのであり、建党は彼らを救うものではなく、その逆であつた。次に我々は彼らが組織の脱落分子、動揺分子をきわめて恐れ、次々に処刑していつた過程に注目すると同時に、これと彼らが内ゲバを今後やらないようにしよう他党派にかつて語つた事実とがいかなる論理的な一貫性を持っているのかを検討する必要がある。一般には、きれいな事を言つていながら、それと違つた事を行なつた彼らの弱さ、あるいは革命的資質のなさが語られているが、これは全くピントはずれであつて、赤軍派は論理的に一貫しているのである。彼らは他の左翼党派とはゲバトを行なわないと言つたのであつて組織内の粛清、テロルは一度も否定してはいない。彼らにとつて革命の内と外は赤軍派の内と外に一致し、その内部においては軍隊の規律（実はブルジョア軍隊の規律）が唯一の組織原理であつて、その外は即ち革命の外側であつて、そこでの活動は第二軍あるいはブルジョア的合法の枠内の組織にすぎず、その活動家は同伴者、お客様としてしか「革命組織の人間」によつては扱かわれない。外側の

人間に対しては寛容であり、原則はない。このような内と外の使いわけは、実はブルジョア国家権力の側の設定する合法と非合法の区分に対応している。それゆえにこそ内部の人間は決して外部の人間に再びなる事は許されない。彼らの用語で言えば、「戦士」は「人民」になる事は許されないし、「戦士」が「人民」になる事は反革命である。なぜならば、外部の人間となる事はブルジョア的に合法の人間になる事であり、バリケードの向う側へこちらの情報を持つて行く事であり、非合法の領域・革命の内部の領域が犯され、反革命的行為となるのである。かくして「人民」は永遠にお客様として、革命の外部に置かれ、革命は彼らが独占する。リンチ殺人は彼らの原理への背叛でもなく、適用の失敗でもなく当然の帰趨である。このような内と外の論理そのものが粉碎される事なしには、連合赤軍派リンチ殺人事件を批判する事は不可能である。

我々はこれまで述べてきた事で明らかなように、わが党对国家権力という事を軸として階級闘争を見ない。プロレタリア階級对国家権力を軸として見、その間での闘いの刻々動く闘いの前線を革命と反革命の境であると考え。それは一義的には決める事ができないものである。そのため、革命と反革命の境すなわちプロレタリアートとつとの内と外はブルジョアジーの決めていた合法と非合法の境とは無関係である。プロレタリア大衆の闘いであろうと党の活動であろうと、それはブルジョア的合法と非合法の両領域を含むのである。党、軍あるいは第一線のいずれであろうと、非合法の領域に限定される事はないし大衆組織の活動が合法の枠内に止まらねばならぬ理由はない。合法と言い、非合法と言つても、それは階級的力関係からブルジョアジーが決めた事であつて、大衆の闘いによつて変化するものであつて、階級的闘いの前進はその枠を拡大する事に常に意味する。いいか

えれば、プロレタリア大衆の闘いこそが、自らの合法性を拡大し、闘いとつてゆく。党の側がそれに枠をあらかじめ与えることは、かえつてブルジョアの設定する固定化された合法、非合法の区別にすんではまり込んでゆく事であり、反革命的である。連合赤軍派リンチが反革命であるのは、それが人民裁判でなく党の裁判であるがゆえに、プロレタリア大衆はそれを支持する理由はなく、さらにそれは、大衆不信、大衆への恐怖を底に持つ同志不信のはての処刑であるがゆえに、大衆にとつて認める事の出来ないものであり、さらにそれが同志の喪失、反革命の増大のみを意味するからである。このような処刑を拒否する事は、赤軍派の存在を知ろうと知るまいとあらゆる大衆の権利に属する。そしてこのような大衆の拒絶の権利の存在は、革命を志す者の初めからの前提条件のはずである。逆にそれ故にまた、大衆の信頼を獲得するという事実が、革命組織者にとつて巨大な意義も持ちうるのだ。

我々は、党の闘い、あるいは党の軍隊の闘いに革命運動の力点を置く一切の発想を排しプロレタリア大衆が自らを闘いの中において権力へと高めてゆく事、(これが階級として自らを組織するという事だ)に全てを賭けなければならないのであることを再び強く確認しなければならない。

IV 新左翼運動過度期の終焉と 左翼反対派運動の克服

以上のようにみえてくるとき、連合赤軍派とは、新左翼もまた受けついできた旧左翼の母

斑が無惨な形で現われたものであり、党を大衆の上にあるもの、選民とする思想の破綻である。我々は、このような結末をむかえた連合赤軍派を生み出した新左翼、なかんづく共産主義者同盟の内包してきた内部の思想的体質を切開し、自己批判しなければならないと考えている。

共産主義者同盟は二つの性格を持つて成立した。一つは日本共産党に対する左翼反対派としてであり、それは単に日共への対立ではなく、日共そのものも本来持つていた社民に対する左翼反対派の思想の継承であつた。第二には党の大衆闘争への抑圧並びに引きまわしに対する、大衆の意向の代弁、闘う大衆の本流であるとする自負。

前者は本質的に大衆の中での少数者であることを感じ、それが存立の基本条件であるが故に、逆に左翼正統派思想にしがみつき、自らが党派を形成すること自体、大衆との分離を意味することを認めることができないこととなる。そうであるが故に大衆を代表していることを言いたて、大衆に命令しようとする基本性格を有するのである。これは日共・革マルに典型である。

後者は、常に大衆を信頼し、それに依拠するが故に逆に、党が大衆とは全く分離し、独自の領域で闘い活動することに不安は感じず、大衆に指令する必要もないという、党派の大衆からの分離を本質的に貫徹しながら、かつ同時に大衆との結びつきを失わないことが可能となるものと確信するのである。

この二つの基本的に対立する性格は、共に左翼本流であるということによって形式上の統一を保ちつつ、常に内部闘争の原因を形造つてきた。ある時は前者が党至上主義、後者が大衆運動主義の形をとり、ある時は、前者が左翼反対派主義、後者が左翼主流主義として現われ、また別の時は前者が行動主義的倫理主義として一見大衆の相貌を帯び、後者が逆に政治技術主義の相貌を帯びた。

この十余年の新左翼の闘いは、このような左翼の基本思想の過渡期として存在したのである。六十年安保闘争においては大衆は戦後民主主義体制の最左翼として、市民主義極左派として、戦後の価値観と論理の内にあつてその枠をそれ自体の展開によつて打ち破ろうとした闘いであつた。この枠自体が自壊することを前提とする大衆暴力闘争の時代へと、移つてゆく中で、新左翼のはたすべき歴史的役割もまた変化してきたのである。

この十余年新左翼は大衆の戦闘エネルギーの体现者として闘つてきたし、そのことによつて、社会的な秩序の亀裂の存在を顕在化し大衆暴力の登場を促進してきた。そのかぎりで左翼正統主義(代行主義)と革命人民の本流主義の対立は、未だ決定的なものではなかつたし、そうであるが故に、左翼反対派思想との闘いは本格的ではなく、反対派根性が温存される根拠を有していた。だが、現在、このような左翼反対派思想は闘いの妨害物に完全に転化している。大衆の暴力、大衆の革命遂行能力への不信は、大衆の闘いをおし止め、一握りの左翼によつて代行しようとする事によつて闘う大衆を戦線から追放している。このような行為は反革命である。

現時点の階級闘争は、反革命政治包囲網の形成にみられるように表面的には階級闘争の冬である。だがわれわれは荒野の予言者、孤立せる革命者に止まつてはならないのであつて、「法と秩序」は政治の表面、社会の表面を覆っているが、大衆の暴力化・社会秩序の空洞化は深まつているのであり、われわれは大衆との結合能力を持つ政治集団として、大胆に大衆と共に、大衆に奉仕し闘わねばならないのである。敵権力が大衆を組織化しようとしている今こそ、大衆を信頼し、大衆の道具としてわれわれは闘わねばならないのである。

だが、この十余年の闘いのうちで、大衆内部の前衛でありかつ大衆の外にある党である

といった曖昧な大衆と新左翼の結合関係は完全に終わった。大衆に対してセクト的でないという共産主義者同盟の大衆的シンパシーも終りをつけた。まさしく新左翼の一時代は終わったのである。このことを自覚しない党派は失墜するであろう。

大衆は代々木・社民・新左翼を問わず、大衆とは無関係のセクトとして見はじめた。我々はこのような党派闘争に勝たなければならぬのである。すなわち左翼性を大衆に対して示すことではなく、大衆が革命に向う際の有用性・有効性の問題として大衆は党派を見ており、新左翼に対する近親感・寛容はもはや、存在しない。

我々は左翼正統主義・その裏がえしとしての左翼反対派主義を完全に捨て去り、人民の革命の大道の真直中において、文字通り、意識的に大衆と結合し、(何をやついても大衆とは結合しているという甘えをなくし)、大衆の闘いに協力しなければならないのである。

我々の自己批判とは、何よりも、共産主義者同盟こそが、左翼反対派思想をその内部から追放し、根絶しうる諸条件を持ち、大衆もまたそれを期待していたにもかかわらず、その極限的な形態である連合赤軍派を生み出し、大衆の期待に背いたことに対してである。

またここで大衆暴力の大統合と拡大という方向に背いて、セクトの小さな枠に閉じこもろうとする敗北主義の発生にも痛打を浴びせておかなければならないであろう。

すなわち連合赤軍派の誤りは連合したことにあるという批判である。これは他党派からも連合赤軍の内部からも発せられている後ろ向きの批判・精算主義である。もし連合赤軍が真に革命の軍隊であつたのなら、連合は必然であり当然であつた。そうでなかつたが故にそれは悲劇となつたのであつて連合そのものが問題であつたのではない。革命の軍隊は人民の権力機関であつて党派によつて分断さ

れるべきものではない。革命の軍隊は党の政治路線の一体化によつてではなく、革命の戦闘行為そのものによつて統合されるべきものである。そのかぎり軍の連合・統一は誤りではない。それは党の領域の問題ではなくプロレタリア大衆の領域の問題である。連合赤軍派の悲劇は、党の軍隊の連合にすぎぬものを人民の軍隊の統一と錯覚したことによる重圧に耐えられなかつたのであり、党の統一・党の一枚岩化が要求され、それを軍隊の論理によつて行なおうとしたことにより、ブルジョア的な内部秩序、同志的秩序ではなく、権力的・テロルによる秩序のみが可能となつたのである。

赤軍派の政治思想はその必然としてその軍隊をブルジョア的な軍隊にしてしまった。それは指導部と一般兵士の関係をブルジョア的ヒエラルヒーに転化していつたことが、リンチ事件の全過程が明らかになるにつれ、暴露されていつている。これは軍隊を党の私兵とする思想から必然化されたのであつて、技術としての軍隊である以上、技術の思想(ブルジョア思想)は軍隊の内部に浸透し、革命の構造をつき崩すのである。

我々が革命の軍隊というとき、それは大衆の革命化の表現としてであり、その組織はブルジョア的な軍隊の革命そのものを意味する。軍隊の内部ヒエラルヒー自体革命されなければならないのである。それ故我々は、革命の軍隊とは、赤軍—正規軍を中心に考えるべきではない。赤衛軍—民兵の系譜こそ本質的なものであつて、それこそ軍隊それ自体の革命を体現するものであると考える。それによつてこそ、人民への抑圧としての暴力の止揚が可能となるのであり、(ブルジョア的な暴力の否定は、暴力の隠蔽にすぎない)、国家権力の止揚が可能となるのである。このような契機を持たない軍隊は革命の軍隊ではなく、私兵集団にすぎない。

我々は暴力の問題を手段の選択の問題とし

てでなく、大衆暴力の顕在化という社会的な条件の問題としてとらえ、それに依拠し、プロレタリアートの、階級への形成・権力への形成を軸として、それに党派として寄与し闘い、共産同にも残つた左翼反対派思想を完全に捨て去り、共産主義者の党としての独自の任務を遂行するであろう。そして大衆的政治

同盟としての共産主義者同盟の同志諸君は大衆の中にあつて、その先頭に立ち、プロレタリアートの権力に向けて、闘争を大衆的に拡大深化させてゆくであろう。これらを通じて我々は、我々の自己批判を現実化してゆくことをプロレタリア同志諸君に誓うものである。

4・17 新入生歓迎集会

挨拶 松本礼二
講演 広松 渉
場所 牛込公会堂
(5時開場)

主催 社会主義学生同盟

5・6 共産同政治集会

「第三世界の革命闘争と
世界革命への展望」

—— キューバ帰国報告 ——

松本礼二
場所 豊島振興会館
(5時開場)

三里塚鉄塔建設報告

社学同三里塚現闘本部

全国の革命的同志諸君！
ローテ読者諸君！

現在、日夜鉄塔建設の任にあたっている社学同現闘より六月開港阻止、三里塚空港粉砕闘争勝利に向けた連帯のアピールを送りたい。

三里塚の闘いは、一次収用阻止から二次収用阻止の闘いの中で、日本階級闘争の69年以降の戦線の後退と、権力の攻撃を破り、70年代権力闘争、階級戦争への先端を切り開き、日本階級闘争の最前線の位置を確保している。

とりわけ二次収用阻止、9・16・東峰、駒井野の機動隊解体の闘いは、反対同盟・支援部隊の武装で勝利し、大衆武装の一步を決定的に実践化した。三里塚闘争は日帝の経済的対外膨張、政治・軍事的アジア侵出の中で、国家権力からの国際空港設置—農村共同体解体、土地収奪に反対する、農民の土地防衛闘争として始まったのであり、当初の「土地を防衛する」闘争を6年有余展開して来たのであるが、その闘いは日帝権力への暴力闘争としての革命性を持続し、日帝の戦後社会の矛盾・平和民主繁栄の擬制、農村政策破産等の一切を暴露し、その戦後社会の解体—権力闘争の方向を持つに至っている。「土地を守る」から「空港建設の阻止」という戦闘方向の転換が、三里塚闘争全体の闘いの質的発展と革命性を示している。又、反対同盟実体も、青年行動隊・婦人行動隊・少年・老人行動隊という年代層を破り、闘いの共同性を勝ちとり反対同盟全体が武装体制を敷き、権力への反撃を強めている。そしてこの三里塚の闘いはなによりも、農民の層としての闘いではなく農民・学生・労働者の闘いとして展開され、

権力闘争、暴力闘争を媒介にして、階級—全人民武装を自ら形成している。9・16の闘いの勝利は、とくに全人民武装を一步実践化し大衆武装暴力闘争のみが、日帝権力に最も打撃を与え、物理的にも機動隊—公団を解体することが出来るのだということを示した。9・16の大衆暴力武装闘争—遊撃戦は、60年代の市民主義的実力闘争から本格的な大衆武装闘争への転換を成し遂げんとした闘いであり、我々社学同は、その闘いを領導し、同盟の武装をもつて最先頭で闘い抜いた。

さて、9・16以後、権力はその闘いに怯え「警官殺し過激派」のブル新等の報道を通し、反革命宣伝と、青行隊から学生の大量逮捕をもつて、闘争、組織破壊を企ててきた。しかし権力の反革命宣伝、闘争破壊も、三里塚空港粉砕の闘いの革命性を打ち消すことはできない。

我々は、9・16の闘いを更に発展・拡大するために、三里塚の反対同盟と共に、反撃体制を、6月開港阻止—鉄塔建設として押し進めていることを報告しておきたい。鉄塔建設として更に新たな闘いへと進撃を開始せんとする、これからの闘争こそ、三里塚闘争の大なる展望を左右する、決定的なものになるであろうとしている。鉄塔建設は、「6月開港阻止」に向けた攻撃的戦闘の位置を占めている故、我々はこの攻撃的戦闘を担い切るために、反対同盟の再反撃武装体制を進め、支援労働者・学生との結合を行つてゆかなければならない。そのことは、反対同盟・労働者学生全体を、戦闘組織として打ちかため、統一的指導（本部）の下で戦闘が展開出来るものでなけ

ればならないことを意味する。この戦闘体制の意識的構築を、「開港阻止」「機動隊—公団解体」の闘争へ展開することであり、かつして、「鉄塔死守」という一発的玉砕路線で展開することは許されないのである。

9・16の勝利とは農民・労働者・学生の暴力性を広範に組織し、その中に武装隊を配備する体制をとり、機動隊—公団を、我々の陣地に誘い込み、逆包囲したところに勝利のポイントがあつたのであるから、開港阻止の闘いは農民・労働者・学生の暴力性を拡大、組織し抜くことで、敵、機動隊—公団に勝利してゆかなければならない。「鉄塔死守」のみでは、闘いの縮少と後退を意味する。

かかる方向をもつて、「開港阻止」「鉄塔建設」の闘いがあるのである。

この三里塚の闘いは、かかる広範な大衆の暴力と、その中に持つ革命性を引き出し、権力に勝利してゆく大衆暴力武装闘争として展開し、日帝の権力再編・アジア侵略・反革命解体の闘いの内実を獲得しなければならない。

かかる展望の下での三里塚の闘いこそが、沖縄人民の大衆叛乱・暴力との連帯を意味する。

日帝は「沖縄返還」をもつて、戦後の米・アジア体制に結着をつけ、今やアジアの盟主の位置を築きつつあり、「沖縄返還」は日帝の国内・アジア全域に及ぶ帝国主義的再編としてある。

三里塚もその日帝の社会再編の中にあり、当然空港粉砕の闘いは、農村政策反対とか、政府打倒という闘いの枠をもつものではなく権力に全面的に対決してゆく闘いとしてある。

そして三里塚空港粉砕の闘いは空港がもたらす公害反対、パイプライン反対の地域住民を決起させ、それは、「開発」を大義とする空港建設が、農村解体、都市及びその周辺の工業化という行政権力の暴力的強行策で行なわれているのに対する強烈な怒りとして登場している。

三里塚闘争は、地域住民の暴力叛乱と結合せんとしている。それは3・12住民総決起集会が最も良く示していた。

我々は、日帝の社会・権力再編の矛盾が生み出す大衆叛乱こそ、大衆暴力の根拠として指摘してきたし、同時にこの大衆暴力に依拠した大衆暴力闘争を展開し、大衆武装闘争を形成拡大してゆくことを三里塚闘争の中で意識的に追求してきた。

しかしその大衆の叛乱・暴力に無自覚な諸党派は、大衆暴力を革命の暴力と権力闘争へ形成してゆく視点を一切もちえず、60年代の市民主義的実力闘争や、政治過程への闘いへと、闘争を一面化してしまつている。

中核派をはじめとする軍事空港への一元的な規定は、少くとも、昨秋の第二次代執行粉砕闘争の切り開いた地平を前進させるものではない。もちろん、軍事空港・軍事外交路線の一環を担うものであることは言うまでもないが、問題となるのは、帝国主義の権力・社会再編の進行が、市民社会内部に於ける大衆の分解、階級構造の動揺・解体をせまり、大衆の発現様式が、大衆暴力として、政治過程への接近形態そのものが大きく転換されつつあることである。即ち、今日の、多様な「地域住民闘争」として表現されてきた大衆叛乱は、単なる一片のスローガンへの枠はめを拒否して存在しているし、三里塚闘争は、最もラジカルに、その頂点として進展していることを確認せねばならない。昨年、9・16の地平が、「大衆暴力」を基軸に展開された如く我々は、三里塚闘争の飛躍を、大衆暴力闘争の最前衛として、6月、そして、それ以降の闘いを領導し抜くであろう。鉄塔を中心とした、開港阻止の闘いは、アリバイ闘争的に歪曲させることは、絶対にできない。

70年代アジア侵略に向けた権力—社会再編が日々進行し、それが大衆の生活過程の深部からの「住民運動」として生起してきている時代にあつて、我々に問われているのは、

「住民運動」をそのまま放置したり、議会議運動への左からの補完物として位置づけたりする事ではなく、それらの運動が、戦後市民社会秩序を根底から解体してゆく過程を通じて、いかにその闘いの革命性、暴力性、世界性を獲得してゆくのかという事であり、様々な闘いの全国性、共同性、同質性を獲得してゆかなければならないのだ。

そして、我々が、三里塚農民の闘いと連帯・結合出来るのは、どこかの党派のように、ズブズブの土着主義的に生活過程を共有することでは決してない。農民闘争一般へと問題を矮小化し、それへの支援といったことでしか、問題が立てられていない現状を、根底的にくつがえさねばならないだろう。

67年以来、新左翼の登場がアジア侵略反対・反戦闘争を媒介として、暴力闘争の世界性・同質性を自らの闘いの内に獲得し、結合せんとしたように、三里塚農民との結合は、闘いの共有性・暴力の同質性の中に、はつきりと連帯し抜くものとしてなければならぬ。そうでなくては、農民の個々の主体をあれこれし、論理付けようとする、基本的には、革マルのブチプル規定と同根の発想へと転落せざるをえないのである。三里塚農民の闘いの世界性・革命性は、農民という階層を媒介とし、闘争の共同性の中で、それ自身をはるかに超えた地点で、表現されて来ているのである。そうでなければ、〈土地防衛〉の闘いをこえ、権力闘争へと、接近することが、一切理解できない。青解派のプロレタリア統一戦

線論の限界は、明らかに、〈プロレタリアート〉それ自身が先験化されているが故に、プロレタリア統一戦線の一環としての革命的農民闘争といったように図式化されるだけである。中核派に至っては、農民の気持を理解することだけに懸念である。今日の闘争が、住民・市民・労働者・農民・漁民というような社会的な規定性を自らが解体し、大衆的な暴力的発想をなしている中で、問われているの

は、新たな階級の共同性へと組織し、それらを「階級に組織された暴力」として牽引することである。69年の敗北以来、党派軍団・党軍統一戦線へと、党派の代行主義へと奔走し現実的に生起している大衆暴力を切り捨てて来た構造に対し、昨年の三里塚の闘いは、軍事的にも、大胆に、大衆暴力の革命性をかい間見せたのである。我々の、大衆暴力闘争として一貫して提起して来た独自路線こそ70年代を権力闘争として担い切ることができ、必ずや、その最前衛として闘い抜くだろう。

全国の革命的同志諸君！

社学同現闘は、この間、鉄塔建設一防衛を最先頭で克ちとるとともに、革命的な、ノンセクトの同志諸君の、三里塚でのめざましい闘いと連帯し、断固として開港阻止を闘い抜くことを宣言しておきたい。我々と反対同盟の農民の固い決意に恐怖した、権力一公団の気遣いじみた弾圧は、増々激しさを増し、権力はガードマン、反共団体暴力団を要して、日夜を分かたず、空港警備に必死である。権力は、我々の鉄塔建設の現場に現われ、掲揚したり、遠くの方から、望遠鏡でのぞくといった、憎悪まる出しの弾圧をかけて来ているのである。三里塚闘争の、六年有余に及ぶ闘いの質と革命性を断固として防衛し、更に権力闘争に形成し抜く主体として、諸党派の議会議主義的歪曲や、組織温存主義を粉碎し、そして、三里塚農民との真の連帯を克ちとる中から、成田空港粉碎を最後まで闘い抜くことを全国の同志諸君とともに確認したい。

反革命包囲網に対する反撃に向けて

社会主義学生同盟

全ての学生、労働者諸君！！

社会主義学生同盟は、60年代後半の階級斗争の主軸を負って来た「全共闘一反戦」という第二次新左翼運動の全面的崩壊という事実をはつきりと全人民へ告知すると同時に、この解体しきつた新左翼、日本の各所で闘われている、住民運動の広汎な人民の斗争の体系的、特続的展開は我々に課せられた歴史的事業であるとばかり宣言する。全ての労働者、学生諸君が、この日本階級斗争の一段の発展と歴史的事業を共に達成されん事を要請する。全ての同志諸君！！

社会主義学生同盟は、この一年間の闘いを通し、「大衆暴力斗争の全人民への拡大」「人民の暴力を社会深部で組織する事を通し権力に対する包囲と、解体、権力の弾圧に対する防衛、反撃」という階級斗争における戦略的かつ実践的課題を提出し、一貫して実行してきた。しかしながら、この様な中であつて、日本階級斗争は、69年秋期決戦以来、その敗北の壁と、権力の帝国主義社会再編の攻勢に全面的に対決し抜き、打ち破るには至っていない。この日本階級斗争の後退的局面にあつて、現在、階級斗争を担う主体の内部に、権力の攻撃と弾圧に耐え切れず党派の内への閉じ込めりと、内ゲバ等による階級的暴力の墜落を発生させている部分がある。人民に対する政治指導を放棄し、暴力の一派への私物と化す密集化は、結果として、人民からの遊離と、階級戦線の分散化を促すだけなのである。このことは、すでに我々が再建準備委員会を組織するにあつて、「同盟を同盟たら

しめていたのは大衆の闘いに根拠を立てつつ、それを越えようとする志向であつた」。とブントの最もラディカルな側面を継承し、官僚旧戦旗派の諸君をはつきりと批判していつた。「党が軍を通してしか統一戦線、大衆を指導出来ないのは、60年代後半の同盟の限界に答えるのではなく、党の軍による階級斗争の代行にほかならず、党の政治指導の放棄である」というのは現在に至つて、混乱する新左翼諸党派への警告でもあつた。

この60年代階級斗争の間われた課題に対し、全く無自覚に自らのセクト的延命をはかつて来た部分は、今、階級斗争が突き当たっている壁を対象化しないばかりか、反革命的行動に出て来ているのである。この階級斗争の分岐を鮮明にしたのは、昨年の斗いであり、特に三里塚一沖縄斗争であつた。昨年三月の三里塚、第一次強制代執行粉碎斗争は、戦後ブルジョアジーの形成して来た擬似的国家の共同性と、権力的社会再編の実体的進行を余す所なく暴露し、国家暴力を全く市民社会に根を持たない階級暴力として浮び上らせ、それを打ち砕く人民の戦士の結合を勝ち取つていつたのである。三里塚斗争が示していつた質は帝国主義権力一社会再編が社会に生起する、矛盾を包摂し得ないばかりか、市民社会深部での軋轢、矛盾から発生する大衆的叛乱が、常に権力の実体的配置を問題にし、又権力を問題にした人民の叛乱の拡大・深化、その中に戦後の階層的規定性を越えた広汎な人民の団結を育成し、この陣形の中に権力の実体的攻撃一社会再編を粉碎していく路を大胆に切

り開いた所にある。国家権力—暴力部隊を部分的、局部的にセン滅しうるまでも、この事実は、70年代階級斗争の基本がその閉鎖された人民の暴力の解放と拡大を通し、その暴力を封殺し続けた旧左翼、自警団等の国民的暴力の反人民性と階級性を暴露し、解体する事の中に、現状の打開と、プロレタリアートの階級への形成を保障するのである。我々に問われていたものは、以上のようなプロレタリアートの暴力力量の増加と拡大でありその暴力を全面的に権力形成する共産主義者の暴力との結合を、権力斗争として中央権力斗争—マツセンストライキの展開の過程に勝ち取っていく事であった。

この階級斗争の新局面は、空論主義者の存在根拠をも根底的に解体していった。すなわち大衆の自然発生的叛乱に拜跪し軍隊による先行性、突出性を政治指導と考えていつた彼らにあつては、最早、その手段としてある軍の力量が、大衆的暴力の力量に何ら優位性を明らかにし得ないことにより、政治指導の放棄と、待期主義、革マル主義へ墜落してしまつてゐる。故に彼らにあつては野合的統一と、その暴力の内ゲバへの転用しなくなるのだ。他方、大衆斗争の持続的展開に全く拜跪する部分にあつては、その暴力の問題を(プロレタリアートの階級斗争の手段一般へ転落させ)戦後的階層の域内へおし停め、その左翼性に追従し、党派の援助斗争、肉体的奉仕主義に落ち入り、議会主義的国民運動へ大きく傾斜して来ている。すなわちこのことが三里塚斗争のさ中に現われた「農民の土地防衛支援」というスローガンによく表わされており、又それに代表されるであろう。三里塚農民が生活の糧と土地の防衛を通し明らかにしていつた国家権力の本質と地域開発に名を借りた帝国主義的社會再編の内実は、そのブルジョアジーの存立基盤である市民社会秩序に於いては、統括出来ないものとしてあり、帝国主義者との闘いは、彼らの存立基盤をつき崩した

人民の暴力的結合に於いてのみ可能であり、その運動的広がりの下に、全国的広がりをおしはかつていく事が問われた。この三里塚斗争が切り開いた、すぐれた先行性を、四月統一地方選挙、又秋期における「佐藤政府打倒」等の国民運動に包括されるかにみえた。

このような国民運動路線への傾斜は、ベトナム革命戦争が突きだした革命性に敵対するばかりか「沖縄返還を目前にした現在」、ブルジョアジーから「次は尖閣列島だ」という中国との領有権の帰属問題をめぐつた国民運動の形成と、日本階級斗争総体に於ける国民運動への傾斜に対して一切斗争を組織し得ず一國主義へ転落せんとして来ている。

米、ソの平和共存による政治的世界分割の意味は政治的外枠による階級斗争の圧殺とその枠内における各国国民経済の確立であつた。この実体は米・ソにおけるナショナルインタレストの世界的追求であり、収奪を可能とする後進国経済の再建の道は、後進国問題が単なる原料の問題ではなく、それを可動せしめる、社会構成が帝国主義の世界体制に適合性を持つて形づくられることであるため単に権力が外枠を形づくるのでは不十分であつて、直接帝国主義権力、又は手先が、そこまで深入りすることなくしては問題の解決たり得ない。「開発戦略」の実体はその点において権力性そのものであることを頭わにせざるを得ない。

この帝国主義の世界支配に対決し抜いているインドシナ解放革命における「民族」は、帝国主義本国との関係に於ける「民族」ではなく、帝国主義者により引かれた「国境」を否定し、帝国主義世界体制の解体へ向う民族の形成へ向かいそこに民族解放斗争が直接的世界性を表現しているのである。この中で日本帝国主義者が直面している「日米経済戦争」沖縄返還を前にしたレアードの訪日により明らかにされた四次防の実体、→この事実はニ

クソンの外交教書により裏づけられている一等的問題は「日本帝国主義の国際協力の不十分性」とそこにおけるエコノミック・アニマルぶりであり、この帝国主義間の矛盾の増大は、日帝をして世界戦略を持つ事を強要し、一步一步アジアの激動へ足を踏み入れざるを得なくなつてゐるのである。以上みたように、日本帝国主義も後進国をさけて「世界」へ関係する事が不可能であり、日本帝国主義も又自らの内部に重層的な第三世界の問題をかかえ込まざるをえず、「沖縄、入管」等の問題は日帝が「世界」へ関係するために通らねばならぬ関門としてある。この様な中で沖縄の返還と共に提出されている尖閣列島の帰属問題は、彼らがブルジョア論理上での、一般的な、日本帝国主義の領有権の主張を代弁してみせたり、又、「社会主義中国」への帰属を主張したりすることではない。後進国、「民族」に直接的に国境を確定し、東南アジアの再編へ向う帝国主義者の権力配置認識を確定し又それが広汎な国民運動として形成されている現実とそれへの闘いにおける我々の位置規定を権力斗争の問題として明確化することである。

沖縄返還の問題は、以上のような革命斗争の世界性と、又、現在進行する日本帝国主義の社会再編の問題をも、沖縄人民の全島の決起により最も鋭角的に表現している。沖縄返還斗争粉碎の過程で沖縄から発せられた「アメリカもだめだがヤマトンチューもだめだ」という失意の念は、単に平和幻想、日本への復帰に対する失望だけでなく、「東南アジア再編へ向う」日本の権力再編<軍事基地の問題>と自治体等の再編を通した沖縄の地域開発—再編の実体に対する全島の反抗でもあろう。地域開発と、沖縄経済の発展のためにと屋良主席を始めとする革新部分の本土資本の配置が沖縄の自然の破壊、第一次産業から労働力の分離を強制的に推し進め、本土への若年労働者の大部分の流入、又、本土に

おける差別支配の構造化という事実以外の何ものでもなく、この帝国主義再編の進行に於ける秩序派、旧左翼、国民運動主義者の反階級的役割をも先鋭に顕在化させて来ているのである。この中であつて新左翼の限界は、そのプラグマチックな政治対応のみではなく、国民運動における排外主義と、差別支配の構造化を通した。自警団等を始めとする反革命政治動員との根底的対決と、セン滅へと向う階級的任務に無自覚である。//

以上、指適してきたように、「左」右の日和見主義の敗北は明確である。しかし、現在帝国主義者の権力再編の原的転換と、その階級的攻勢の前にあつて、われわれは単に彼らに対する批判のための批判にとどまり、「冷笑」にふけつたりすることは出来ない。再度ブルジョアジーの攻撃を逆包囲し粉碎し抜いてゆくための陣型の一翼として彼らを参加させてゆくことである。その過程で革命原則の獲得を推しすすめてゆく広範な統一戦線の問題であると我々は考える。その階級的成熟は客観的にはある。

わが同盟は、この間の帝国主義の動向の実体を世界的には過渡期世界の帝国主義再編として把握しつつ、国内的には社会再編、権力再編として規定した。それ故、69年の秋9月「ブルジョアジーが政治的対応を避け、行政的対応として出てくることに対し、社会的反乱と結合し、全国的に中央・地域・職場・学園の総体における政治的反乱としてブルジョアの政治—議会主義の枠をうち砕き、大衆的土俵をつくり出すことこそがブルジョアの行政的優位と、政治的無能力をうちやぶることができるのであり、中央権力闘争—マツセンストの結合こそが秋の闘いにおいて議会主義左翼をこえて、大衆の前に前衛として立ちうる戦術的環なのだ」と提起した。そこにおける社会再編、権力再編とは戦後資本家社会が支配の根幹としてきた「議會制民主主義」の風化と、その分解が新しい質の闘い—「社会

革命的なもの」「直接民主主義への欲求」等々を大衆的な暴力的社会反乱として呼びおこし日本帝国主義の政治的・社会的ヘゲモニーのゆさぶりに対し、「行政的」「制度的」管理を把大化させる事による支配の維持、支配の安定を保証せんとする帝国主義の運動を示してきた。それ故に、69年秋、ブルジョアジーは「戦後民主主義の平和と繁栄」に依拠した、「社会秩序の破壊か防衛か」という支配階級＝ブルジョアジー独特の政策は「自衛団」形成に端的に表現されていった。われわれの敗北は、このブルジョアジーの根底的危機の根源に対決することなく、安楽・沖縄闘争のブルジョアの政策次元、または政治過程主義の思考の域を出ることなく、軍事的敗北を必然化させていつてしまった我々の政治思想－政治指導の敗北の限界についてであった。

それ故、わが同盟の再建の出発点は、革命の原則としての、「革命は人民の事業であり革命に問われる軍事、武装は基本的に、大衆武装に根を持つこと」であることを確認した闘いであった。党一軍による「革命の代行」は許されない。これは革命の原則である。現実とその事は三里塚闘争の9・16が示した。共産主義者同盟の14年間にわたる闘いは、革命は権力問題であり、権力問題を一般に趣味に陥し込めることなく、大衆運動のなかで鋭く権力問題を提起し、その実践の先頭に立つてきたことである。

われわれはこの間「戦略とは、階級闘争の現実過程における大衆との結合環として存在している。」と規定し、戦略に権力問題である、階級形成を包括させ、組織戦略・戦術の具体化、運動戦略・戦術の具体化を、帝国主義者の攻勢＝権力再編に對し、実践し抜いてきた。（詳細は同盟文章を参照してほしい）この基本は決してかわらない。

問題なのは最初に指適したように、帝国主義の権力再編の質的転換に對し、日本左翼諸

戦線の戦略的立遅れである。誤解を恐れずに言うなら、世界階級闘争の前進と、日本革命の現実性に根ざした、われわれの戦略の具体化である。

米・中コミュニケ発表以来、アジアの革命闘争は新たな段階に突入している。世界帝国主義体制の動揺の激化は、慢性的危機の時代を示している。だが、ブラックパンサー、ヨーロッパ諸党派の混乱と分解も、日本左翼戦線と同様である。

この世界階級闘争に規定された、日本支配者階級の孤立と動揺は権力再編の質そのものを転換させてきている。その質を把握しよう。

米中接近と台湾・中ソ対立と両国への接近・国際市場からの締め出し（「ローテ」12号）という日本支配者階級の二重の矛盾は、権力再編の基軸となっている。それ故、社会権力再編は、「技術革新」、「行政権力」の把大化に止まることなく、帝国主義国民総動員体制の確立へと向っているのである。その事が四次防の軍事力の増強、国家警察の強化をしての支配秩序の暴力的再編として、地域、社会再編の強権的介入であり、戦後階級階層の分解の促進と大衆の存在様式の変化の政治表現としての大衆暴力（革命）闘争に対する人民内部の反革命部隊の組織化として進行させてきている。労働戦線における戦線統一と、マル生運動は顕著に、その権力再編の方向がどこにあるかをあらわしている。

（分析については「ローテ」10号の社学同関西協論文を参照）。日本支配者階級の攻撃が、「戦後民主主義」に依拠していることは自からの革命の現実性をベトナム革命の永続性と、世界的な大衆の暴力闘争に見、その大衆暴力に戦略的に依拠出来なかつた部分にとつては混迷の要因となつている。この「戦後民主主義」に依拠した攻撃は帝国主義対立とアジア革命勢力の包圍のなかにあつて、民族的排外主義を形成してゆく要素であり、帝国主義国民総動員体制において、またブルジョ

アジーの展望せざる得ない国民経済の確立とともに、そのイデオロギ的環なのである。

それ故、69年秋登場してきた「自衛団」の政治的性格と、現在形成されている人民内部の反革命部隊（右翼勢力とは異なる。）とは、政治性格を異にしてきていることは明らかである。この間の「連合赤軍」事件に対する、支配者階級の執ようなまでの政治宣伝は革命派（また反社会行動者を含め）を「アカ」として大衆にイメージさせることによる、大衆のもつ戦後資本家社会への不満と暴力の革命派との結合の分断として徹底的に押し進められてきた。共産党・社会党・公明党・マスコミ・小市民・大家、町内会、労働組合、大学等々、一体となつた「アカ」狩り、「刀狩り」こそ権力再編の質的転換として顕著な例である。

この支配者階級・ブルジョアジーの階級的矛盾激化は、日本革命の客観的成熟を意味するのである。確かに政府危機は、一貫して進行している。日中国交回復、4次防、沖縄「密約」、そして「外務省極秘電報漏えい事件」等々が自民党の分裂の顕在化と促進としてあらわれ「議会」における多数支配の形骸化にハク車をかけてきている。野党の立脚点も何ら自民党のそれと異なる事はなく、政治過程の空白化は増大している。しかし、これらは、革命の原則を確認したものにとつては問題とされることではない。この事は、我々が三里塚闘争、沖縄闘争と諸々の戦いで明らかにしてきたように、沖縄闘争を「返還阻止」か「調印阻止」＝「奪還」か等々の「政策」次元の闘いに反対し、日本帝国主義の社会・権力再編への闘いとして戦略的に位置付け、各個別戦線へのそれへの総力をあげた闘いとしてなしてきた事で明確化され得ている。

わが同盟は70年秋次のように語つた。「各々の戦線での大衆運動は、常にその段階にあつて権力問題が問われる時機に到達している。それ故に、権力とは大衆暴力を革命暴力とし

て不断に人民が獲得してゆくことである。その中核体として大衆政治同盟＝共産主義者同盟を再建せよ！！」。この事は第二次三里塚闘争9・16にあつて、武装した大衆の反乱の中に、国家権力を引きずり込み粉砕してゆくという、日本革命の現実的型態を端的に示した。その後のブルジョアジーの混乱と動揺こそが三里塚闘争が革命闘争であることへの恐怖であることの証左なのだ。三里塚が社会的物質的条件にめぐまれてからという客観主義論争は「ヘボ学者」連中の言語活動であり、革命党派には許されぬ事である。今、三里塚のもつ、社会的・物質的条件は、現在の市民社会深部にある。ブルジョアジーの危機は、それへの反革命攻勢である。

ここ数ヶ月、とりわけ三里塚闘争以来、大衆運動の各戦線は、内部に権力問題が問われながらも、自からの経済主義的発想と、支配者階級の前述した攻撃の前に狭撃され分断され、混迷している。「三里塚闘も、入管闘争も、基地・反軍闘争も、住民闘争も、保安処分闘争も、破防法闘争もあります。我々は各々の戦線でガンバツテマス」では、革命闘争での待期主義もはなはだしい。決して、各戦線で日夜闘い抜いている同志諸君を軽べつする意味でいつているのではない。各戦線で問われている権力問題が均質であるが故に、現在の権力再編に對決し抜くわれわれの戦略が同時的・同質性をもつて各戦線で討議され実践されねばならない。各戦線を担う事で、自からの党派性とする時代は終つた。

第一に、各戦線をブルジョアジーの攻勢への逆包圍をなす、プロレタリア権力を包括した広範な統一戦線として再構築してゆくことが日本革命の火急の任務である。この事は、68年～69年の大衆暴力（革命）闘争からくすぶりつづけてながらも、その戦後支配の環をうちやぶつてきた大衆の政治表現としての暴力の自然発生の根そのものをブルジョアジーの攻撃から防衛し、反撃してゆくための重

要な点である。

全国の同志諸君、！ とりわけ学生戦線の同志
諸君、！ 大衆武装の拠点を形成し、ブルジョ
アジー＝支配階級への反撃を開始せよ。

われわれは、共産主義者同盟＝大衆政治同
盟の再建を克ちとり、それへの実践的連帯を
なすことを確認したい。

口一テ 第14号 (¥5.00)

編集・発行 = 口一テ 編集局

連絡先 = 044-92-2578

(明大生田学館内 山田良雄気付)

(仮)